

〔新刊紹介〕

R. A. Craig 著 畠山久尚 訳

『宇宙空間の科学—超高層大気 of 諸現象』

河出書房新社 ¥ 390

原著は未完であるが、1956年 MIT が広く教育関係者をもって組織した Physical Science Study Committee による Science Study Series のうちの1冊であって、新しい総合的な高等学校物理教育計画に含まれるもので、このシリーズの和訳はすでに「現代の科学」として本書で26冊を数えている。そのうち固体地球と宇宙物理関係に2点あるが、地球大気では本書がはじめてのようである。

略歴によると原著者 Craig は MIT で気象学の Sc. D. を得たようで、あるいはそうした関係が本書執筆の直接の原因ではあるまいか、というのは、もともと Craig 博士は大気オゾンの専門家で、かつて海洋の市栄誉教授の在籍したフロリダ州立大学教授として著名であり、最近成層圏と中間圏の大気物理学に関するきわめてすぐれた専門書 (The Upper Atmosphere, Meteorology and Physics, Academic Press, 1965) を刊行し、米気象学会での中間圏および熱圏下部のエキスパートとして知られているが、科学啓蒙書の執筆はおそらくこれがはじめてではあるまいか。科学啓蒙書というものは、その必要性は誰でも分るが、すぐれた科学者であるからといって簡単に書けるものではない。現にこの Physical Science Study Committee は物理学者、高校教師、ジャーナリスト等多方面の人々で構成されており、Craig 自身そのまえがきで「科学者としての素質のある青年と科学に関心のある一般人」を対象としたため「過簡単化と不必要な丁寧さを避けねばならぬ」かったという困難を指摘している。この困難を打開するため彼は息子の M.A.

Craig に原稿を精読させて、多くの記述の変更について示唆を得たといっている。かつてある文学者がこれに類した方法で文章を推敲したとも伝えられるが、ともあれ著者のそうした努力は、本書を通読してよく感じとれるのである。

本書の章立ては、第1章高層大気を観測する方法、第2章高層大気の温度、第3章太陽と高層大気、第4章高層大気の組成、第5章電離層、第6章大気潮汐と地球磁場、第7章高層大気からの光—オーロラと夜光、第8章最も外側の大気、第9章高層大気への挑戦、となつて、現在のほぼ地球大気全般にわたる解説が、全く数式を含まず、平明な記述と簡単な図でなされていて、しかもそれらは種々の高度での物理量を測定する具体的方法とそれによって得られたその量の数値的評価によって定量的に裏づけがなされている。あえて、注文をつけるとすれば第7章、第8章の熱圏以上の部分についていまい少しページをさいてほしかったと思うのは、筆者の身勝手というものかも知れない。

本書の日本版訳者は、上記のように畠山久尚博士であるが、筆者は畠山博士がこうした地球物理学の最新の領域になお深い関心を持ちつづけておられることに、実のところ驚嘆しているのであるが、翻訳というものは手間のかかる割合には引きあわないもので、訳者もそのあとがきに「訳者の目から見ての著者への注文もないわけではないが、それは全部読者に譲った方がよいと思う」とある。つまり、訳者は原著を選ぶ自由はあるが、原著の責任のすべてを負うものではないのであって、こうなると読者である筆者がいまさら注文をつけるぐらいならご自分でお書きなさい、ということになってしまう。ものいえば唇さむしとはこのことで、つまるところまたしても畠山博士に脱帽しない訳にはゆかぬ破目になってしまうのである。 (堀内剛二)